

【成果概要】5-3 海水温上昇等による瀬戸内海の水産生物や養殖への影響調査

調査結果の概要

(瀬)瀬戸内海、(日)日本海

■ 平成30年度の成果

- 気候シナリオから将来の海水温の予測を試行した。(瀬)
- 養殖漁業の主要漁場を対象に、藻類や貝類の生育適期の変化や暖海性の食害魚による養殖漁業への影響予測を試行した。
- ワカメの養殖適水温期間は、地域、水深により異なるが、現在より短縮傾向となる可能性がある(RCP8.5)。(瀬)
- ワカメの食害期間は、地域、水深により異なるが、現在より多くの地域で数日増加する可能性がある(RCP8.5)。(瀬)
- 各自治体/隠岐でヒアリング調査、各種文献調査、データ収集を実施し、山口県で暖海性魚類が着実に増えている様子を確認した。(日)
- 中四国3県の現在把握できる水温データ、漁獲量データについて把握を行った。(日)

■ 明らかとなった課題

- 暖海性の食害魚の成育状況については、特に瀬戸内海における海水温度が低い冬期の知見が少なく、今後も実地調査等で精度を高める必要がある。(瀬)
- 将来の海水温を陸域の将来予測気温から作成しているが、その精度等については、精査を進める必要がある。(瀬)
- 現在、各県の漁獲量から経年変化等を分析しているところであるが、今後、水温との関係性も分析する中で、社会状況の変化等の考慮をしていくことなどが今後の課題である。(日)

■ 平成31年度の調査計画

- 海洋シナリオを用いて養殖漁業の対象となる藻類や貝類、暖海性の食害魚に関する影響を予測し、影響評価の精度を高める。(瀬)
- 予測モデルを検証・改良し、養殖漁業への将来の影響を評価する。(瀬)
- 今年度の調査をもとに、特定魚種等について水温上昇との関係性を分析および、将来への影響への分析、適応策の検討を行う。(日)

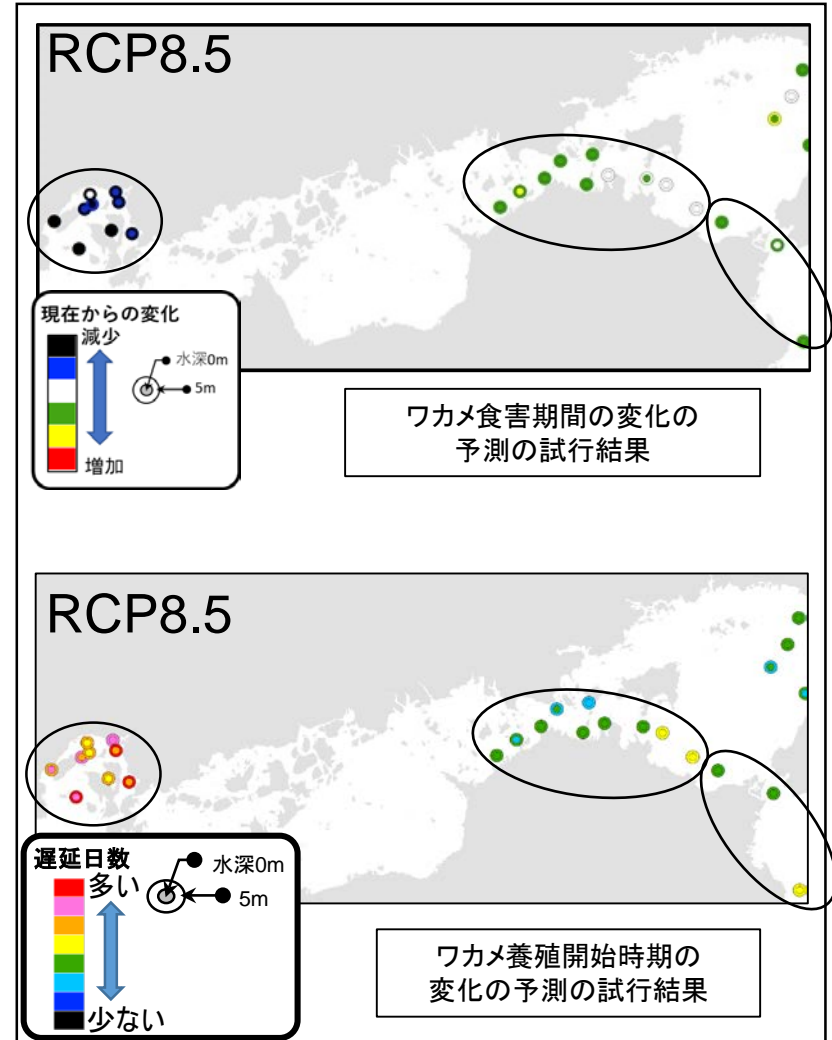


図 影響予測の試行結果
(RCP8.5、21世紀中頃、MRI-CGCM3)

注: 本試行結果は、暫定的な海水温予測モデルを使用した結果である。